

ダイバーシティ事業 国際人事交流プログラム（派遣）  
研究交流報告書

報告日：2020年3月2日

派遣者所属名	神戸大学大学院保健学研究科
派遣者氏名	小寺 さやか
<p>シャリテ・ベルリン医科大学はEUで最大規模の大学病院を有する医科大学である（フンボルト大学医学部と西ベルリン自由大学の医学部の両方を代表する医学部）。今回派遣された保健看護学研究科は大学院課程のみを有し、コメディカル（看護師、助産師、理学療法士、言語聴覚士など）を対象とした修士課程（Master of Public Health）のみの大学院である。派遣期間中は、主に以下の5つ観点から研究交流を行った。</p> <p>1) ドイツのヘルスケアシステムと健康課題 ドイツでは住民が身近にアクセスできる保健関連施設（保健所・保健センター等）はなく、予防サービスは非常に限られている。それにも関わらず、健康指標はEU内でもトップクラスである。その背景をヘルスケアシステムとの関連から検討し、一定の示唆を得ることができた。また、ドイツで取り組むべき健康課題について知見を得ることができた。</p> <p>2) Immigrant Healthに関する研究の動向 ドイツは欧州一の移民大国であり、移民政策による外国人居住者や移民をルーツに持つドイツ人は全人口の約23%（2016）を占めている。ドイツ国内における多様な民族的背景を持つ患者や集団に対する取り組みや移民の健康課題について、研究者へのインタビュー等から明らかにすることができた。</p> <p>3) ドイツの看護教育の現状と課題 ドイツの看護職の社会的地位が低いこと、看護職の大学教育化がEU圏内でも遅れていること、日本と比べて看護師の業務（Scope of nursing）が限定されていること等、ドイツの看護を取り巻く課題を知ることができた。Community health nursingの分野については、モデル教育プログラム（修士レベル）開発のイニシアティブを取っているドイツ看護協会を訪問し、community health nursingに関するディスカッションを行った。</p> <p>4) 看護師を対象とした多文化対応能力の向上を目指したトレーニングプログラムの開発 シャリテ・ベルリン医科大学病院看護部を訪問し、現在日本で進行中の看護師の多文化対応能力の向上を目指したトレーニングプログラムについて、共同研究者から意見を聴取した。</p> <p>5) その他 大学院生のゼミナール等に参加し、看護研究の動向を把握するとともに、共同研究の可能性についてもディスカッションを行った。</p>	

#### 海外派遣終了後の研究交流の進捗状況（2021年3月現在）

シャリテ・ベルリン医科大学・保健看護学研究科の関連施設であるシャリテ・ベルリン医科大学病院ウテ・シーベルト博士らのチームとともに、JSPS（A）「世界をリードするインバウンド医療展開に向けた看護国際化ガイドライン」（研究代表者：野地有子）の一環として、共同セミナーの開催や意見交換等を行った。共同セミナーは、日本の看護職を対象に2020年3月に「ドイツ・シャリテ医科大学における多文化対応能力トレーニングIPIKAプログラムの開発」、9月に「異文化環境における対立への対応」と「病院における差別・格差への対応」、10月に「インターカルチャー・コミュニケーション」、2021年1月に「多文化環境における医療倫理」をテーマに、日独間を繋いだウェビナーにて実施した。今後、これらの成果についてまとめていく予定である。